

会社をやめて会社をつくる 千本倅生

2000年の本。

◇CMプロデューサーから植木職人
庭いじりが趣味。

彼は、新聞折り込みの求人広告を見て、近所の植木屋に弟子として入り、二年近く修業した後、後に独立して自ら植木屋を営むようになった。

実際、開業時にかかったのは百七十万円ほど。そのうち百万円は営業用のトラック購入費、パンフレットや名刺などの印刷物に二十万円、道具代は三十万円、その他の雑費が二十万円程度だった。

賃金が安いということは、仕事の価値が低く見られているに通ずるからだ。仕事をする人にとって、仕事の価値がどのくらい認められているかという問題は、かなり重要であるはずだ。十分に商品価値のある仕事を安く売っている人、仕事に見合う報酬を受け取っていない人は、その道のプロではない。単に趣味人でしかない。それで「生きがい」を感じているといえるのだろうか、痛切に思う。

趣味のみに生きることは、必ずしも万人にむくことではない。
自分で事業を起こすかどうかは人によって考え方も違うだろうが、少なくとも趣味に生きるよりは、趣味を超えて仕事をするほうがはるかにおもしろいに違いない。

長い間、組織に属し、そのメカニズムの中で動いてきたサラリーマンには、会社中心の生活をするに慣れてしまっていて、自分が好きなこと、趣味を持たないで過ごしてきた人が多いのではないだろうか。仕事からみのつき合いでおぼえたゴルフ、カラオケなどの趣味しか持っていないサラリーマンが少なくない。

そういう人たちはまず、「自分が好きなことの発見」から始めなければならない。巷には、同好の士が集まって趣味を楽しむサークルの類いがたくさんあるが、まずそういうところから入って、好きなこと、熱中できること、やりがいを感じられることを探してみるのもよい。

何が好きということは、人間に強い力をもたらす。好きなことを持つことは、人生に潤いを与え、豊かにする。このことは、起業をしようと思わない人にも大切なことである。

労働省教育訓練給付制度

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/jinzaikaihatsu/kyouiku.html

いちばん初めにすべきことは、自分の考えの確認である。文字通り原点に立ち返って、何をしたいのか、

本当にこういうことがしたいのか、やり遂げようと決意ができるのかどうかを、まず確認しなければならない。

福岡県に「嘉飯山福祉労働企業組合」という企業組合がある。企業組合とは、中小企業等協同組合法に基づく法人で、出資者が四名以上いれば設立できる。だが、この組合は、七十数名の大所帯である。

ここでは大工や木工職人、植木職人、ホームヘルパーなど、さまざまな技術を持っているが、すでに定年を迎えた人たちが仕事をしている。

一人暮らし老人の家の掃除や庭の手入れ、家屋の修理、火事の焼け跡の後かたづけなど、一般の業者が引き受けたがらないような隙間の仕事が多く、それもあまりお金を持っていない相手ばかりで利益も多くないので、収入は少ない。だが、現場に出て仕事ができることが彼らの生きがいになっている。

もっと自分の思いを込めた仕事をする事の喜びというものもある。

そういう仕事は、仕事をする事自体が喜びになるのだから、いままで雑用と称してきたことを自分でやることに何ら抵抗がないばかりか、その雑用さえ、自分の生き甲斐づくりの一部として喜びになる。

「商い」は「飽きない」——最後まで粘り抜く。